



知っておきたい病気・医療

# 「性差医療」

見逃さないで！男女で異なる病気や症状

～注目が高まる「性差医療」の知識を持とう～

## 男女で異なる病気や症状

同じ病気でも男女でかかりやすさが違ったり症状の出方が異なる、また男性に多い病気でも、年齢とともに女性の発症率が増えてくるものもあります。このように、多くの不調や病気に性差が関係しています。正しい知識を身につけることは、病気の早期発見・治療のためにも重要です。今回は、男女で異なる代表的な病気や症状などについて、性差医学・医療を専門とする政策研究大学院大学 保健管理センター 所長・教授の片井みゆき先生に伺いました。

Adviser 政策研究大学院大学 保健管理センター 所長・教授/  
日本性差医学・医療学会 理事長

片井みゆきさん



信州大学医学部・同大学院内科系修了後、米国ハーバード大学医学部リサーチフェロー、東京女子医科大学准教授（性差医療部／女性内科）等を経て、2023年に政策研究大学院大学 保健管理センター 所長に就任。性差医療のバイオニア的存在として、女性のライフステージに寄り添う女性専門外来に長年従事。その経験を活かし、2019年からAMED受託研究「女性診療を支援する『AI診断支援ナビゲーションシステムWaiSE』」研究開発代表。

男女では体の構造が異なるのはもちろん、ライフステージ（年代）ごとの性ホルモン（男性ホルモン・テストステロンや女性ホルモン・エストロゲン）の変動、経済状況や就労状況といった社会的背景もそれぞれ異なります。こうした生物学的性差、ライフステージ、社会的文化的性差を考慮し、その人にとって最適な質の高い医療を目指す「性差医療」の研究や実践が進められています。

男女で異なる病気には前立腺肥大症、前立腺がんといった男性特有のもの、月経困難症や子宮筋腫といった女性特有のものがあります。一方、男女共通の病気でも、発症率や死亡率、発症しやすい年代や症状の出方などに性差が見られるものも少なくありません。

### 閉経後の女性に痛風が増える理由

男性に多い病気の一つとして知られる痛風ですが、加齢に伴って女性も痛風リスクが高まります。

この病気は尿酸値が高い状態（高尿酸血症）が長期間続くことで発症します。女性ホルモン・エストロゲンには尿酸の排泄を促す働きがあり、ホルモンの分泌が活発な間は尿酸値の上昇が抑えられています。ところが更年期を迎えるとエストロゲンの分泌が急激に減少します。そのため尿酸値が上昇し、痛風リスクが増加すると考えられています。女性のライフステージにはエストロゲンの分泌が増え始める初経から、ピークを迎える妊娠、出産、そして急激に減少する更年期、閉経と大きな節目がいくつかあります。

| 男性に多い病気                                                                                                                  | 女性に多い病気                                                                                                                                     |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・脳卒中（脳出血、脳梗塞等）</li><li>・腎臓の病気</li><li>・痛風</li><li>・狭心症・心筋梗塞</li><li>・糖尿病</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>・骨粗しょう症</li><li>・関節リウマチ</li><li>・うつ病やその他のこころの病気</li><li>・甲状腺の病気</li><li>・脂質異常症（高コレステロール血症等）</li></ul> |

男性も男性ホルモン・テストステロンは加齢に伴い減少傾向にあり、男性更年期障害と呼ばれる心身の不調が生じる場合があります。ただし、女性の更年期に比べ、認識されにくいのが現状です。

## 求められる、うつ病への性差の配慮

「うつ病やその他のこころの病気」の通院者率は女性が男性より1.4倍程度多くなっており、うつ病が男性より女性に多いのは世界的な傾向であることが、米国の大規模調査<sup>※1</sup>などからも分かっています。その背景には、女性ホルモン・エストロゲンの急激な減少や、妊娠・出産・育児・介護といったライフイベントによる環境や役割の変化などが一つの要因として考えられます。

一方、うつ病の最も不幸な転帰である自殺は、男性が女性を上回っています。この要因の一つとして、男性ホルモン・テストステロンの減少が気分障害や自殺行動への関与を示唆する報告<sup>※2</sup>などがあり、性ホルモンの影響が考えられます。また、男性は仕事や社会的役割などの重責を負っているケースが多く、つらくても弱音を吐けず、我慢してしまう傾向が見られる反面、精神科や心療内科への受診を躊躇する男性も少なくありません。これらは社会的、文化的な性差といえます。身近な人がうつ状態にあるようなら、たとえ本人が「大丈夫」と言ったとしても、早めに受診を促すといった配慮を心掛けましょう。

※1 Psychol Bull.2017 Aug;143 (8) :783-822. ※2 Journal of psychiatric research.2012 Oct;46 (10) :1267-1271.

## 性差による症状の違いが命に関わることも

同じ病気でも、男女で症状の出方が異なる代表的な病気に、急性心筋梗塞があります。急性心筋梗塞の症状といえば締め付けられるような強い胸の痛みや冷や汗が典型的ですが、あごやのど、肩や背中への痛み、吐き気などの非典型的な症状もあります。研究によると、典型的な症状を訴えるのは男性に多く、非典型的な症状を訴えるのは女性が明らかに多いことが分かってきました。

日本の「急性心筋梗塞登録（JAMIR）」で登録された2万462人の患者を対象とした調査では、男

性の入院患者は1万5,281人と、女性5,181人の約3倍に上りました。一方、入院から30日以内に死亡した割合は、女性が男性の約2倍に達しています。

女性のほうが男性より死亡率が高くなってしまいう要因の一つとして、症状が非典型的で多岐にわたることから心筋梗塞だと診断が下されるまでに時間を要する、あるいは自分でもまさか心筋梗塞だとは思わないため救急車を呼ぶのを躊躇し、受診が遅れてしまう、といったケースが少なくありません。こうした事態を防ぐことも性差医療の課題の一つです。このように、性差は多方面に関わってくるので、一人ひとりが性差による症状の違いなどの知識を身につけておくことは、命を守るために大切です。

## 女性は更年期と似た症状に注意を

更年期前後の女性が気を付けたいのが、「心身の不調を何でも更年期症状のせいと決めつけない」ということです。自分では更年期症状だと思っても、実は別の病気が隠れている可能性があります。心身の不調がなかなか改善せず、特に強く気になる症状がある場合は、なるべく早めに専門の診療科を受診しましょう。

診察前に下記のようなメモを用意しておくことで診断がスムーズです。

### MEMO

- 現在、自覚している症状や最も気になっている症状は？
- その中でも、最も気になっている症状は何ですか？
- 症状は、どんな時にひどくなり、どんなことで改善するのか？
- 月経の状況。  
（最終月経はいつか、月経不順はないか、いつ閉経したのか）
- その症状について今まで受診した診療科や検査結果、同じ症状に対して過去に処方された薬と効果について。
- 現在、服用している薬は？  
（お薬手帳があれば持参）

